

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：22604

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23248

研究課題名(和文)個人化における女性による女性の貧困を問題とする社会運動に関する社会学的研究

研究課題名(英文) Sociological Research on Women's Social Movements that Question Women's Poverty due to Personalization

研究代表者

仁井田 典子 (NIITA, NORIKO)

東京都立大学・人文科学研究科・客員研究員

研究者番号：00852170

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、2008年に立ち上げられた「女性と貧困ネットワーク」に積極的に関わった女性たちへのインタビューをもとに、つながりが希薄化して個人がバラバラにされていく「個人化」が進行するなかで、彼女たちが自分と同じような状態におかれている他者に対する「弱さ」への共感により、対等な立場から互いを気づかい合うことで、つながりをみいだしていることを明らかにした。特に20～30代の女性たちは、社会的に存在しない者として扱われ、社会規範により存在が問題視され、家庭や職場で補助的な労働を押しつけられるといった社会が生み出す矛盾を、自分たちが抱え込まれていることに対して怒り、その怒りを社会に表出しようとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日の日本社会において「個人化」が進行するのに伴い、社会運動や労働運動に対する社会的関心が低下している。また、そうした運動の集まりでは、その多くで男性中心の運営が行われていると指摘される。そうしたなか、「女性と貧困ネットワーク」では、女性たちが他者に対する「弱さ」への共感によりつながりをみいだしていることを明らかにした。本研究は過去に活動していた集まりを調査対象としているが、コロナ禍を経て女性の貧困の問題に対する女性たち自らの異議申し立てが鳴りを潜める現在の日本社会において、「女性の貧困」とはどのような問題であるのかについての解明に大いに貢献するものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Based on interviews with women who were actively involved in the Binbow Women's Network [Women's Poverty Network] established in 2008, this study sheds light on how these women have, in the context of deepening "individualization" that has weakened connections and left individuals increasingly isolated, created connections by practicing mutual care as equals while sharing a sense of "vulnerability" with others who find themselves in similar circumstances. Women, especially those in their 20s and 30s, attempted to express their anger at having to carry the burden of the various contradictions created by a society whose norms consider them problematic and invisible and that relegates them to auxiliary labor at home and in the workplace.

研究分野：社会学

キーワード：社会運動 女性 個人化 共感

1. 研究開始当初の背景

人と人とのつながりが希薄化し、個々人がバラバラにされる「個人化」が進行するのにもなっていて、人と人がつながることを主な目的とする社会運動がみられるようになってきている(大畑裕嗣 2004「モダニティの変容と社会運動」曾良中清司ほか編著『社会運動という公共空間』成文堂)。また、日本の社会運動や労働運動においては、男性中心の組織運営が行われており、女性たちが周縁化されている一方で、私がこれまでに調査研究を行ってきた、女性のみを対象とした個人加盟の労働組合においては、女性たちが平場で上下のない関係性を構築し、労働運動への対処を自分たちが行なっていくなかで、組合員同士のつながりが構築されており、組合員の女性たちは活動を通じてエンパワーメントされるといった現象がみられている(仁井田典子 2014「脆弱で、不安定で、曖昧な連帯の可能性:ある女性コミュニティ・ユニオンを事例として」『解放社会学研究 28号』日本解放社会学会)。

そうしたなかで「女性と貧困ネットワーク」(2008年~2012年)は、2008年年末から2009年年始にかけて、日比谷公園で「年越し派遣村」を開催した「反貧困ネットワーク」から派生して誕生した。2008年に集まりができた当時、女性は「男性に扶養されるべき存在」として扱われており、男性と比較して女性の非正規雇用者の割合が高いこと、女性の正規雇用者の賃金が相対的に低賃金であることは、社会的に「問題ない」とされてきた。そうした社会的な認識に対し、「女性と貧困ネットワーク」は「貧乏でも安心、女性で安心」というスローガンを掲げ、「女性の貧困の可視化」を目的として、当時50代60代の活動家の女性たちが中心となって集まりが形成されはじめた。次第にこの集まりには、当時20代30代の単身の女性たちが数多く集まり、活動は盛り上がりを見せたほか、マスメディアでも取り上げられた。「女性の貧困」は、2011年に新聞で報道されたことをきっかけとして、社会問題として認識され始めた。その後「女性と貧困ネットワーク」は、2012年にホームページで事実上の活動終了が発表された。

それから10年近く月日が経過したものの、未だに女性は「男性に扶養されるべき存在」であるとか、女性の貧困は「自己責任」であるといった認識が、社会的に払拭されたとは言いがたい。

2. 研究の目的

本研究は、2008年から2012年に集まりを形成していた「女性と貧困ネットワーク」を事例として、この集まりはどのような特徴を持つものであり、かかわっていた女性たちにとってどのような意味を持つものだったのか、そして、どのようにしてこの集まりがなくなっていき、この集まりの存在がかかわった女性たちのその後の人生にどのような影響を与えているのか、これらの点について明らかにしていく。こうした作業を通じて、「個人化」が進行する今日の日本社会において、「女性の貧困」とはどのような問題であるのかについて考察することが、本研究の目的である。

本研究を開始した時点で、既に「女性と貧困ネットワーク」がなくなってから10年近い期間が経過していたことから、この集まりが行なわれていた時期の日本社会とはどのようなものであり、コロナ禍を経てどのように変化してきたのかについても、あわせて考察した。

3. 研究の方法

本研究は、「女性と貧困ネットワーク」に積極的に参加していた女性たちへのインタビュー、当時20代後半の大学院生でこの集まりのイベント参加者のひとりだった私の「女性と貧困ネットワーク」における参与観察の記録のほか、彼女たちが現在に至るまでに書いたもの、彼女たちが所属する組織が発行する機関誌などの文書をデータとして用いた。

「女性と貧困ネットワーク」に積極的に参加していた女性たちへのインタビューについては、私自身がこの集まりで開催される集会やデモなどのイベント参加者のひとりであり、「女性と貧困ネットワーク」にかかわりのあった女性を対象としたコミュニティ・ユニオンの組合員だったことから、当時この集まりに積極的にかかわっていた知人にインタビューをお願いし、雪だるま式に次の対象者を紹介してもらう方法をとった。

4. 研究成果

「女性と貧困ネットワーク」は、イベントなどの場において貧困を経験する女性たちの語りが積極的に聞かれる場であった。これは、集まりが始まった当初に、50代60代を中心とした女性を支援する活動家の女性たちが、意図的に「平場で対等な関係をつくっていく」ことを念頭にいた場づくりを行っていたことが大きく影響している。そして、「女性と貧困ネットワーク」が貧困の経験を語ることでできる場であったことは、リーマンショック後の当時、無職や不安定な就業状況におかれていた20代30代の女性たちが集まりやすい環境を生み出したものと考えられる。

「女性と貧困ネットワーク」に集まっていた女性たちはみな、「女性と貧困の可視化」を目的としていたものの、これまでの豊富な女性を支援する活動の経験がある 50 代 60 代の活動家の女性たちと、そこに後から集まって来た 20 代 30 代の女性たちとは、目的に対するスタンスに大きな違いがみられた。50 代 60 代の活動家の女性たちは、自分たちが虐げられてきた性差別を生み出す社会構造が、女性と貧困の問題を生み出していることを、社会に対して訴えていこうとした。それに対し、20 代 30 代の女性たちは、その当時まさに（ ）単身の非正規雇用の女性といった社会的に存在しない者として扱われる、（ ）社会規範によって、働いていない、結婚していない状態にある自らの存在が問題視される、（ ）女性であるがゆえに、職場や家庭において補助的な労働を押し付けられるといったように、自らの存在が蔑ろにする人びとや社会や対して怒り、デモなどのイベントを通じてその怒りを表出しようとしていた。

「女性と貧困ネットワーク」に集まる女性たちは、「女性と貧困の可視化」を目的としていながらも、焦点を当てて行っていきたい活動や方向性として思い描くものに違いがあり、次第にその違いが表面化していく。それにしたがって、「女性と貧困ネットワーク」は集まりとしての凝集性を失っていき、終焉につながっていった。こうした集まりの終焉自体は、注目してみても価値のないものであることを意味するわけではなく、「個人化」が進行するなかで、こうした集まりが一定期間のあいだ存在したのはなぜなのかについてみていく必要があると考える。既に述べたように、「女性と貧困ネットワーク」という集まりができた背景には、女性の貧困が可視化されておらず、そうした問題について互いに語り合う場を求めて、自発的に女性たちが集まりをつくっていったことがある。この集まりが始まった当時は、リーマンショック直後であり、製造業で派遣労働者として働いていた派遣労働者たちが、仕事だけでなく住まいを失い、その多くが男性であったことから、男性を中心とした貧困問題が社会的な注目を浴びていた。「女性と貧困ネットワーク」に集まってきた女性たちは、そうした男性の貧困問題への社会的な注目を横目に見ながら、なぜ女性の貧困問題には焦点が当てられないのかということや、そもそも女性の貧困は、その個人が未婚や離別を選択した結果であると、社会的に認識されていること、そもそも運動体のなかで、女性が周縁化されていること、これらに対して強い憤りを感じていた。こうしたことが、「女性」「貧困」をテーマとした「女性と貧困ネットワーク」に人が集まってくる背景となったものと考えられる。その後、女性の貧困に社会的な注目が集まるようになっていくなかで、今や「女性」「貧困」というテーマだけでは、集まりとしての凝集性をみいだしにくくなっていると言えるのかもしれない。

最後に、「女性と貧困ネットワーク」はそこに集まっていた女性たちにとって、どのような意味を持つ場所であったのかについてふれておきたい。当時 50 代 60 代だった活動家の女性たちにとっては、この集まりは彼女たちがライフワークとして行ってきた活動の一部であるとともに、この集まりが 20 代 30 代の女性たちとのつながりを生みだしたことから、直接的ではないものの、下の世代に自分たちがやって来た社会的な活動をつないでいく意味を持つものになったと言えるのかもしれない。他方、当時 20 代 30 代だった単身の彼女たちにとって「女性と貧困ネットワーク」は、（ ）単身の非正規雇用の女性といった社会的に存在しない者として扱われる、（ ）社会規範によって、働いていない、結婚していない状態にある自らの存在が問題視される、（ ）女性であるがゆえに、職場や家庭において補助的な労働を押し付けられるなかで、この集まりは自分のことを語ることのできる場であった。それゆえに、彼女たちそれぞれにとって、この集まりに参加する明確な目的があったというよりも、集まること自体が目的化していたと言えよう。「女性と貧困ネットワーク」における集まりは、その後の彼女たちそれぞれの生き方や活動に大きな影響を与えていると同時に、今ではここに参加していた女性たちが一堂に会して集まることはなくなったものの、彼女たちの多くは、この集まりで知り合った人たちと緩くつながりを持ち続けている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 仁井田典子
2. 発表標題 「労働」と「貧困」を軸足とし、フェミニズムの立場から声をあげつづける：就職氷河期世代の高学歴女性の語りから
3. 学会等名 日本解放社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 仁井田典子
2. 発表標題 回想のなかの「女性と貧困ネットワーク」：インタビュー調査を中心として
3. 学会等名 日本解放社会学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 仁井田典子
2. 発表標題 「女性と貧困ネットワーク」はいかにして活動終結に至ったのか：積極的に活動に関わっていた女性たちの語りをもとに
3. 学会等名 日本都市社会学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 仁井田典子
2. 発表標題 ラウンドテーブル：ジェンダーから都市を問う
3. 学会等名 日本都市社会学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------